

# 身近な課題に取り組み生きる力を育む 地域課題解決型キャリア教育

いま注目を集める、地域と高校の連携。この連載では、地域課題に取り組み、高校生はどう成長するのか、また、学校はどのように地域と連携できるのかを探っていきます。

取材文／江森真矢子

## 生徒と地域の「本気」の関わりが互いを育てあう 伊丹育ちあいプロジェクト

第1回 伊丹高校(兵庫・伊丹市立)



ました」

今年3月5日、伊丹高校で行われた「伊丹育ちあい(共育)プロジェクト」成果発表会は岡田学校長(取材時)のこんな言葉で幕を開けた。

伊丹高校は5キロ四方という比較的小さな面積の兵庫県伊丹市にある唯一の市立高校。2003年に「情報A」の時間で「伊丹商店街活性化プロジェクト」をスタートさせ、今年で13年目になる。

発表会では、プロジェクトの全体説明に続き、1年生がチームごとに行った商店での企画実施の成果、1学年全体で取り組んだハロウィンイベントの取り組み報告、情報科目を選択する2、3年生と連携する大学生の発表などが行われた。

約3時間にわたる発表会では生徒が裏方も表方も担っていたが、驚いたのは実行してきた商店街活性化の活動だけでなく、司会や大人に交じってパネルディスカッションに登場する生徒の慣れた話しぶり。各発表やディスカッションのポイントをその場で模造紙にまとめていく力。

生徒たちはどうやってこのような力を身に付けてきたのか。1学年のカリキュラムを中心にプロジェクトの内容を見ていこう。

### 年間を通して高校生が商店街とかがわる

このプロジェクトでは高校生が商店街の活性化に取り組むが、企画をすることだけが目的ではない。高校生と街の人々がつながることを重視し、そのなかで社会の主眼的な参加者を育てることが企図されている(図1)。

授業は1年生全員が履修する「社会と情報」で行われる(図2)。1年間ははじめには授業で使う電子メールや、日報やレポートをアップしたり、商店の人とやりとりをするために使う「いたまちSNS」、文章作成ソフトなどの使用方法を学ぶ。1学期にインタビューや記録の仕方を学んだうえで、店舗インタビュー。その後取り組みたいテーマに沿って1店舗を選び、2回目の店舗調査を夏休みに行い、その店の良いところを引き出す

図2 1学年「社会と情報」の流れ

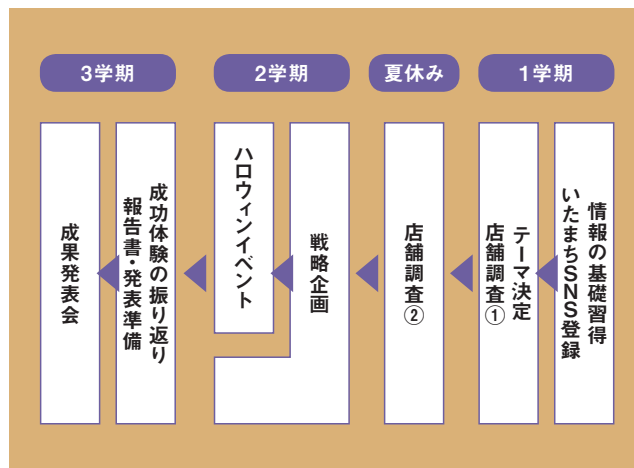


図1 伊丹育ちあいプロジェクトの目標

- ▼ 育つ生徒像
  - 「伊丹がすきやねん」という生徒
  - 「いっちょやったらるか!」という志を持つ生徒
  - 社会起業家
  - 自尊感情を持って自分を伸ばす自立した生徒
  - 議論できる生徒
- ▼ 事業ビジョンと目的
  - 高校生が地元商店街や地域の抱える問題を、店主とともに企画し叶えることにより、自分が社会に関わる意義を見いだす
  - 個人の情報発信する力を要請する
  - 地域社会との連携をすることにより、地域コミュニティを担う地域に根差した人材育成を行う
  - 情報は人と人との信頼関係を基盤としたつながりの上でやりとりされることを体感し、人間関係を体得し、人格の育成を図る
  - 現在抱えている問題に対して議論を行う風土の育成



後列右から  
 綾野昌幸さん(伊丹市都市活力部)、向井大介さん(京都大学学生)、岡田学先生(校長・取材時)、和崎 宏さん(総務省地域情報化アドバイザー)

前列右から  
 坪田知己さん(内閣府地域活性化伝道師)、畑井克彦先生(情報科主任)、西濱靖雄さん(西濱防災ネット技術事務所)

▶ハロウィン当日は伊丹の市街各地で企画が実行され、親子連れなどで賑わう



▼発表会では「できたこと」「できなかったこと」「身についた力」が語られる

▼発表では講師等とのやりとりも活発



▼授業や活動の記録はポートフォリオとして蓄積される

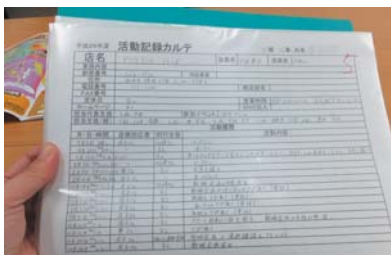


図3 3学期の振り返り「資産の洗い出し」

ダウンロード可



戦略企画にチームで取り組む。並行して、ハロウィンイベントに向けて、店舗でのイベント企画や町中の広場での企画を準備し、10月の最終日曜日に実行。店舗マップの制作・配布、子どものためのゲームコーナーやイベント企画など複数の企画が生徒の手によって実施される。生徒・教員が全員仮装して町を盛り上げるイベントは11年たった今やすっかり市民に定着した。

店舗インタビューなど学校外での活動はすべて夏休みを含む課外で行われ、授業は情報の扱い方や社会の動きを知り、活動のまとめや振り返りをする時間となる。指導のポイントには徹底した振り返り、プロセスや成果の可視化・言語化だ。授業では毎

回白い紙が配られ、授業の内容を要約してノートにとる訓練がされる。毎回授業の後には、1.学んだこと 2.疑問に思ったこと 3.(授業で出会った)新しい言葉 4.感想 をまとめてSNSにアップすることが課され、平常点にも反映される。

そして1年間の最後には、自分がどのように成長したのかを「成功体験の振り返り」として(図3)まとめる。体験したら必ず行うアウトプットと振り返りが生徒たちの成長を促進している。

### 人と人とのつながりこそが地域の活力

では、10年以上にわたるこの活動により、生徒とまちはどう変わったのだろうか。伊丹市都市活力部の綾野昌幸さんは「ハロウィンイベントもエリアが広がってきました。確実に地域が変わった実感があります」。いたまちSNSの開発者でもある和崎宏さんは「人が人をつないで楽しいことをやって、思いやりや信頼がじわっと広がっている。高校生の動きがそれを誘発しているんです。10年前の伊丹とはずいぶん変わりました」と口をそろえる。

このプロジェクトを主導してきた情報科主任の畑井克彦先生が「コミュニティや人とのつながりと学校教育を結びつけて考えるようになったのは、1995年におきた阪神・淡路大震災がきっかけだという。

「人のつながりの強い地域は被害が小さかった。コミュニティの力が一番の

防災になるのです。今、地域創生が叫ばれ、ともすれば観光や特産品作りなどに目が行きますが、本当の地域活性化は、そこに住む人と人とのつながりの活性化のことだと思っています。今の生徒たちには乏しい地域の人とのつながりを結び直し、その中で学ぶことによって主体的に社会に参画する人に育ててほしい。」

そんな思いから発したプロジェクトに3年間参加してきた生徒はこの1年間を振り返って以下のような気づきを発表した。

「私たちの本気が相手に伝わり、地域の方々も本気になる。そしてその本気が地域を活性化させる。この言葉を信じてこれからも地域活動に積極的に参加していきたいと思う。」

#### School Data

スクールデータ(2014年度) 1907年創立/普通科・商業科/生徒数831人(男子330人・女子501人)  
 /進路状況(2014年実績) 大学67.9%・短大4.9%・専門学校16.8%・就職3.7%・その他6.7%